第3学年　道徳学習指導案

1　主題名　　生きていることの奇跡　　内容項目：Ｄ－（１９）生命の尊さ
2　ねらい　　生命の尊さを理解し、かけがえのない自他の生命を尊重する態度を養う
3　資料名　　「エリカ―奇跡のいのち―」
4　指導の展開

	学習活動	指導上の留意点
導入	1　第二次世界大戦中のユダヤ人に対する迫害について知る。 ・当時のヨーロッパの勢力図 ・アウシュビッツ強制収容所	○ナチスドイツの支配下にあったこと、強制収容所の写真などから、ユダヤ人が命に関わる迫害を受けており、どうにもならない状況だったことを捉えさせる。
展開	2　教材「エリカ―奇跡のいのち」を読み、考える。 **発問①　いつ、どこで生まれ、どんな名前かもわからない状況をどう思うか。** ・戦争は残酷だ。　・かわいそう。　・想像できない。 ・自分の生まれも実の親もわからないのは悲しい。 **発問②　母親は、どんな思いでエリカを汽車から外に放り投げたのだろう。** ・危ないけど、死を待つよりは生きる可能性にかける ・離れたくないけど、我が子だけでも生きてほしいから。 **発問　③女の人は、なぜ危険を冒してまで、エリカを引き取ったのだろう。** ・実の両親の子を思う心がわかる人だったから。 ・尊い命を見捨てることは、どうしてもできなかった。 **中心発問 考えてみよう エリカはどんな思いで「わたしのかけがえのないいのちは、いまもかがやいているのです。」と言っているのだろう。** ・両親の決断や育ての親のおかげで、生きて家族をもてた。 ・亡くなった両親や同じ民族の人の分まで生き抜く。	○時代や環境等によって、自分の生い立ちがわからないことがあることを押さえ、もし自分がそうだったらと考えさせる。 ○外へ投げ出すことで赤ちゃんの命が危なくなることも考えさせ、それでも生きる可能性がある方を選んだ両親の苦悩を感じとらせる。父親の気持ちも想像させる（究極の選択、誰かに助けられてほしい）。 ○女の人も子をもつ母親ではないか、女の人はエリカの実の両親の思いをどう受け取ったのだろうかなどと想像を広げさせ、命は何ものにも代え難いことを考えさせる。 ○エリカが生き抜いて家族をもったことは奇跡的なことであり、その命を支えてくれた人々への感謝の気持ちを考えさせ、「エリカが『わたしのかけがえのないいのちはいまもかがやいている』と力強く宣言するのはなぜか。」などと問い返して、本時の価値に迫る。
まとめ	3　振り返りながら，自分の考えをまとめる。 **発問 自分に＋1 命の連続性について考えてみよう。** ・命はずっとつながっているとともに、そこに生きた人との関わりで今の自分が生きている。 ・今自分がここにいることこそ奇跡で不思議なこと。 プリントに自分への振り返りを記入する。	○亡くなった両親やユダヤの人たちのことを考えると生命の有限性を強く感じる。エリカと同じように生徒自身の命があるのも不思議な偶然性であることや先祖からの生命の連続性についてじっくりと考えさせる。

5　評価
　生きていることの尊さや生命のつながり、かけがえのない生命を軽々しく扱ってはならないとする態度が発言や記述に見られたか。